

チェルノブイリ原発事故39年の集い ～被爆80年 核も戦争もいらない！～

2025年 4月20日（日）午後1:30～4:30

大阪市立総合生涯学習センター（第1研修室）大阪駅前第2ビル5階

資料代：800円、学生・障がい者400円

* プログラム *

1. <事務局報告>

ヒバク80年からチェルノブイリ40年・フクシマ15年へ
～ヒバクシャと連帯し、核も戦争も許さない！～

2. <お話し>

「ヒバクシャの医療に携わって想うこと」

村田三郎 さん（阪南中央病院内科医師）

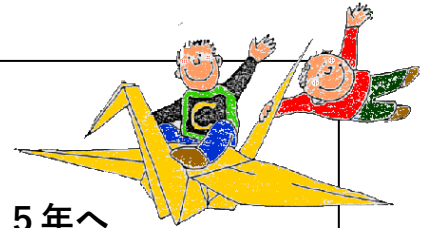
3. <歌と演奏>アカリトバリ さん

4. チェルノブイリとフクシマからのメッセージ紹介

5. <対談> 村田三郎さん & 振津かつみ [救援関西共同代表]

6. <グループ討論> ヒバク80年・日本の敗戦80年…に想うこと[仮]

7. アピール



今年はアメリカの原爆投下による広島・長崎「被爆80年」、日本によるアジア・太平洋への侵略戦争「敗戦80年」です。1945年当時、広島市の人口は42万人、長崎市は27万人。そのうち、日本の植民地政策のために土地を奪われてやむ無く移り住んだり、軍の強制連行によって広島・長崎で働かされていた朝鮮半島出身者が約1割居たと推定されています。原爆の熱線による火傷、爆風による外傷、そして放射能の急性障害で、その年末までの死亡者は広島17万人、長崎7万人と推定されています。原爆投下直後の「地獄」を経験し、なんとか生き残った被爆者は「ころろ・からだ・くらし」の苦しみを生涯抱えながら生き抜いてこられました。朝鮮人被爆者は、さらに二重三重の苦しみを強いられました。

「集い」では、長年にわたり原爆被爆者と原発被ばく労働者の医療に携わってこられた内科医の村田三郎さん（阪南中央病院）のお話を聞きます。村田さんは「救援関西」の代表として「ヒバクの苦しみを繰り返させないで」と先頭に立って活動してくださった長崎被爆者の故・山科和子さんの主治医も担当されました。また大阪での韓国被爆者「渡日治療」の受け入れにも協力をしてこられました。（プロフィールは裏面）



村田三郎さん・プロフィール

1947年、高知県生まれ。1972年、大阪大学医学部卒業。大阪大学医学部附属病院で内科研修後、同病院放射線科勤務。1978年から阪南中央病院に勤務し、現在に至る。関西在住の広島・長崎原爆被爆者の健診と医療に長年携わる。原発被ばく労働者問題にも取り組み、被ばく労働者の労災認定に尽力。

第二次世界大戦後、米ソをはじめ核保有国は核兵器開発を競い、自国内の先住民の土地や植民地支配下の地域で核実験を次々と行いました。1954年に南太平洋のマーシャル諸島で米国が行った水爆実験「ブラボー実験」で、日本の漁船の第五福竜丸がフォールアウト（「死の灰」放射性降下物）を大量に被ばくして乗組員が死亡する「ビキニ事件」が起きたことをきっかけに、原水爆反対の声が国内外で広がり運動が組織されて行きました。このように運動が広がる中で原爆被爆者も声をあげ、「自らを救うとともに、私たちの体験をととして人類の危機を救おうと決意」して1956年に日本原水爆被害者団体協議会（被団協）を結成しました。山科和子さんも原爆で家族を亡くした悲しみ、健康障害や差別、苦しい生活の中から立ち上がり、東住吉区と大阪府下の被団協の組織化に尽力されました。

米国は原爆開発・製造の「マンハッタン計画」の中で、ひとつのウラン爆弾と、二つのプルトニウム爆弾を製造しました。1945年8月6日広島にウラン爆弾、8月9日長崎にプルトニウム爆弾を投下する直前の7月16日に、世界初の核実験「トリニティ実験」をニューメキシコ州南部の砂漠で行いました。しかしこの土地は元々マスカレロ・アパッチなど先住民が暮らしていた場所で、風下にはヒスパニックのコミュニティもあります。トリニティ実験のフォールアウトで被ばくした人々に対して、米国政府は未だに何の補償も謝罪もしていません。さらには、マンハッタン計画に使われたウランが採掘されたコンゴ（当時ベルギー領）のシンコロブエ鉱山では劣悪な条件下で鉱夫が働いていましたが、その実態はほとんど知られていません。

核保有国による核兵器開発競争が進められる一方、アイゼンハワー米大統領が1958年国連で「平和のための核宣言」（アトムズ・フォア・ピース）を行い、原発・核燃料サイクル推進が行われました。ウラン採掘労働と環境汚染による特に先住民の被害、ウラン精錬・核燃料製造、原発、再処理、核廃棄物処分まで、核利用のすべての過程で労働者がヒバクし、環境汚染によって市民がヒバクしています。スリーマイル、チェルノブイリやフクシマの重大事故では、さらに多くの人々がヒバクを強いられ、故郷や生業を奪われています。軍事・平和利用の如何にかかわらず原子力利用が続く限り、ヒバクシャが生み出され続けるのです。

「救援関西」は、チェルノブイリのヒバクシャとの交流・支援を続けながら、フクシマ事故被害者の健康保障を求める運動や、世界のヒバクシャとの連帯・交流にもささやかながら取り組んできました。去年は原水禁大会に参加した米先住民のウラン採掘・精錬被害者を迎えて講演・交流会を持ち、フクシマ事故被災地での交流も行いました。共同代表の振津は、昨年、核実験被害を受けたマーシャル諸島やマオヒ・ヌイ（仏領ポリネシア）を訪問し健診や視察・交流をしてきました。そして今年3月にニューヨークで開催された核兵器禁止条約の第3回締約国会議には、「救援関西」として、条約の被害者支援と環境回復に関する意見書を提出し、振津が代表参加し、世界各地から参加した核被害者＝ヒバクシャと交流を深めてきました。会議には先住民をはじめとする核実験被害者、ウラン採掘、廃棄物処分による被害者、被ばく兵士、それらの次世代以降の人々などが多数参加し、情報や想いを共有しながら、ヒバク被害の根絶と被害者支援を訴えました。ここでも「顔の見える関係」の大切さを改めて確認しました。

世界では、核や戦争をめぐる国際的緊張が高まっています。ロシアのウクライナ侵攻での核使用の脅し、イスラエルのガザへの壊滅的攻撃でも核使用を容認する発言がされるなど、地域紛争で実際に核兵器が使用される危険性が高まっています。さらにウクライナ支援での米トランプ政権との隔たりから、フランスが「欧州独自の『核の傘』」の方針を示すなど核軍縮に逆行する動きも出ています。一方、広島・長崎の被爆を経験し「核軍縮」の先頭に立つべき日本政府が、核兵器禁止条約に署名も締約国会議への参加もせず、東アジアでの米国の「核の傘」の下、軍拡を続けているのは許し難いことです。

「集い」＜対談＞では、村田先生と振津が対談し、ヒバクシャとの交流で学んだことなど確認しながら内容を深めて行きます。また＜グループ討論＞では、参加者が夫々の視点で「80年」を語り合い、議論し、「核も戦争もいらない！」今後の取り組みに繋ぐきっかけにしたいと思います。

ぜひご参加ください！

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西



＜問合せ＞ 電話：072-253-4644(いのまた) , 0797-74-6091(たなか), e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp